

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
 大学院生研究
 2006年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	フランス文学専攻
指導教員	所属・職名	氏名	
	現代心理学部・教授	前田 英樹 印	
自然・人文の別	自然・ <input type="checkbox"/> 人文	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人・共同 名
研究課題名	ジル・ドゥルーズにおける言語と記号を巡る考察		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科フランス文学専攻 3年	大山 載吉 印	
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
研究期間	2006	年度	
研究経費	200	千円	

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、フランス現代思想を代表する哲学者、ジル・ドゥルーズ (Gilles Deleuze) が独自に展開した言語論、記号論を前期の著作『意味の論理学』(*Logique du sens*) と、フェリックス・ガタリ (Félix Guattari) との共著『ミル・プラトー』(*Mille Plateaux*) を中心に解説を進める。これら二つの書物においてドゥルーズが「言語というものの存在の在り方やその機能」をいかに取り扱っているかを確認しその同型性と相違点を指摘することにより、言語に対するドゥルーズの考え方を明確に示す。さらに、そこから遡行されることになる言語の次元に留まらない記号=シーニュの在り方を提示するための補助線を引く。この記号=シーニュの次元は、主に『プルーストとシーニュ』(*Proust et signes*) と『感覚の論理』(*Logique de sensation*) という前期と後期の芸術論 (文学論と絵画論) の読解を通じて、その一貫性を明らかにするものである。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 言語 } { 意味 } { シーニュ }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

研究計画段階での予定通り、本研究はまずドゥルーズがルイス・キャロルの表層の言語やアントナン・アルトーの深層の言語を称揚する書物である『意味の論理学』を徹底的に読解することから始められた。そこでは、フランス哲学からの英米分析哲学と現象学に対する鋭い批判が展開されていることを明確に浮き彫りにすることができた。さらに、これまで言語学の領野においても日本ではほとんど論じられることのなかった、構造主義言語学者イエームスレウの言語理論の骨子をイエームスレウ自身のテキストを読み解きながら、ドゥルーズが彼の理論をいかに創造的に変形させているのか、そこからどのようにして一種の「言語＝命令論」を提案するに至ったかという独自の視点から、フェリックス・ガタリとの共著『ミル・プラトー』(特に第4、5章)を論じることに成功した。これによって、ジル・ドゥルーズの言語論が明確に示される準備が整うこととなった。

これまで、ジル・ドゥルーズにおける言語や記号が論じられることはあっても、それが彼の思考のなかでどのように変遷したのか、あるいはいかなる一貫性が保たれていたのか、様々な著作を通じて全体的な視点を提供する研究は殆どなかった。本研究は何よりもまずこの見通しを提示することで、これまで各々個別に論じられてきたドゥルーズにおける言語や記号の位置づけの全体像を明確に示す新しいタイプの研究となりえたものと確信する。例えば、ドゥルーズにおける言語や記号についての全体的な視点を提供する例外的研究として、*Deleuze and Language, Jean-jacques Lecercle, Palgrave Macmillan, 2002.* が挙げられる。この書物は、ドゥルーズの言語論を翻訳の問題から始め、最後に映像の問題へと段階的に論じながら手際良く纏めたものである。しかし、本研究はこの書物が提示する視点を参照としながらも、あくまでもドゥルーズの言語論における前期と後期の同型性と相違点を明確に示すことと、記号が言語の次元に回収されない点を指摘すること、そこからの展開を主眼とするものであり、ドゥルーズの言語論を斬新な切り口で論じる成果を得た。

本研究はまず、『意味の論理学』から『千のプラトー』へと一本の補助線を引くことから論じられた。一見すると、二つの書物の内容はほとんど共通の尺度をもたないかのようである。前者においては、ストア派とルイス・キャロルのパラドックスが参照され、言語それ自体を可能にする意味(と無意味)の存在位相をめぐる問いが大きく論じられる。これに対して、後者ではもはや意味それ自体が主題になることはなく、一見すると哲学には馴染みのない諸々の概念が飛び交いながら、言語や記号に対して独特の捉え方がなされ、その上で様々な「記号の体制」が論じられることになる。扱われる参照項や概念の大きな違いに加えて、刊行された時期やその受容のされ方、そして何よりフェリックス・ガタリの存在などを考慮するならば、これらの書物はまったく異質なものに見える。本研究では、あえてこれらの書物を出会わせることで、そのあいだにある「同じもの」と「異なるもの」を見定め、『意味の論理学』で十分に展開され尽くされなかったように思われる部分が、『千のプラトー』でどのように記述されているかを提示することとしたい。

その部分とはまさしくドゥルーズにおける「シーニュ」という概念である。「シーニュ」とは単なる記号でもなく、物質でもない。この難解な概念である「シーニュ」は、本研究の補助線に基づいた考察から明確にその本性を引き出すことが可能となった。物質であり同時に記号でもある「素材」である。それは、『千のプラトー』においてまさにその両面に関わる概念である「シーニュ・微粒子＝小辞」として定式化されるに至る。そこにおいて、『意味の論理学』よりもさらに以前の『プルーストとシーニュ』という書物では、まさに「シーニュ」の習得と感受、あるいはその発生を、つまり「シーニュ」の記号性と物質性をドゥルーズが主題としていたことが指摘される。本研究において、この概念はドゥルーズ哲学全体を貫いて流れるものであることを明確に示すことができた。そしてこの成果は、今後、多様な内容を孕み持つドゥルーズ哲学を存在＝時間論、知覚論、芸術論、そして記号論の領野において独立に論じながらも、それらの領野を横

研究成果の概要 つづき

断するひとつの鍵概念として、「シーニュ」を梃子にしながら当のドゥルーズ哲学に一定の見通しを与えようとする研究代表者による博士論文の一翼を担うものとなりえたと確信する。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- ①『ドゥルーズ/ガタリ論集』(小泉義之、桧垣立哉、鈴木泉編、平凡社から2007年7月刊行予定)に所収予定(大山載吉「表層・深層・抽象機械における言語—『意味の論理学』から『千のプラトー』へ—」、頁数などは未定)。